

俳諧袖珍抄
發句之部
壹





芭蕉翁存二氏集

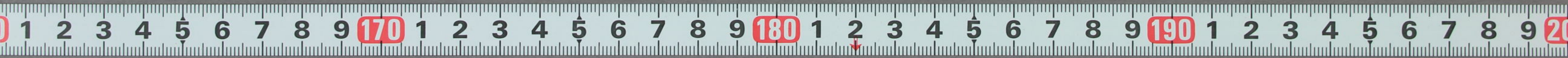
俳諧袖珍抄

京極玉林
文泉堂

如所

俳諧袖珍鈔序

芭蕉翁以狷藩之陪隸。赫
然名著都會。一時名人皆
服為弟子。至今百有餘年。
信奉之者益衆。像之碑之。
香火之。遍於海內。豈徒悅
其詞華哉。又自有所慕也。
翁為人真摯。年裁逾弱冠。
遭其主之大故。痛悼不聊
生。遂至荆淞出家。鞋鞮飄
然。從閑雲野鶴。以畢其生。
今觀其遺詞。語雖俳諧。意
則高遠。與西行之和歌。彭
澤之詩。相伯仲矣。是非其
詞之似也。其人之肖也。余
之先人如山居士。伊賀柘
植之產也。與翁同村。間親
挹其遺風。意甚欽慕焉。性



雖不喜俳歌。至翁之作。時
拈出之。誦賞不已。雖然翁
之名在天下。復何須吾父
子之稱揚耶。但我先人仁
厚忠信。好學力行。有古人
之風。而名不出於一藩。是
罪在於不肖。謙得不力。張
之乎。平安默池生尸。祝於
翁者也。類輯其遺篇。欲上
之梓。以翁為我藩人。未索
序於余。々既不得辭焉。且
事闕先人。不勝風木之歎。
遂併及之。

庚戌陽復月再生魂

鐵研學人齋藤誠識

云々

吾々支那の生
常々々々々々
一冊あり小字
小字一冊の中
之むらさき
乃五冊の掛
くもありそ
くくく木このす
るにありぬこ
るるる折るへ亦

懐しのおゝ
終りし袖りえ
こよふの神隠す
るりこゝろ

記す

成林

八十二巻

折る玉

序

深山乃花曠野の月とれ
のまよりとておの
えりりりすはひ
のにおり 及たを
人まも知せて
まこととて
こそ風雅此
へ公れ我
小冊を編く
ゆゑあむ
社の浦尾

集り志をも一卷を一瞬に
 渡し一歌を袖の内へ納め
 よりあけて又ふふ全蕉門の
 格を知り月むれ活動を情
 のあまこころこも又おのれ
 乃とくくもつ庵きかると
 心もゆらにそめてて終小
 木よあらしむらとさふ
 をこころいふとそれをれか
 ら

嘉永三年 洛
 初月の六 梅邊識

凡例

- 一 祖為一世の自み四喜れ
 題を冠せたるは此例
 又さうりきあわりとて
 物候よあらし終とて
 ことあしん
- 一 奇仙二巻を本邦見後と
 寸さ月むの委伴委格を
 又さうりんとあかしはあま
 大概をほやく
- 一 古於集を本邦上曲とれを
 時代のあるを詳しき
 系由と芭蕉とあきもれ
 留るよ守船中三千一白
 あらまれも南尾の及海
 西ふとあかしは二巻
 小載す
- 一 不願五十員とたし一紙
 文三ふ向七句のそれを
 世とあしはす

一弘の秋乃工袖井せしを
 常律こもきて上本す
 かねの漏脱しあうと一
 後の君子よあしく補ひ
 玉りんを希

類題蕉翁發句集

春の部 目錄

正月	元日	歳旦
立春	今朝春	花春
千代春	君々春	宿春
若夷	庭竈	松飾
鏡餅	齒朶	蓬菜
惠方	年玉	筆始
子日	凍解	氷解
霞	陽冬	糸拵
暮近	春風	春雨
若菜	芥	芥
土筆	若草	春草
野老堀	苜	独活
畑寺	海苔	梅
柳	椿	春駒
猫ノ恋	白魚	獺奈真
鶯	雲雀	二月

栗實 擗花 合櫻井
 李桃 水鶏 水鳥巢
 六月 水無月 土用子
 暑 氷室 雲峯
 風薰 涼 清水
 汗 簟 團扇
 心太 道明寺 蓮
 昼白 夕顔 水葱
 薄茂る 凡畑 真葉丸
 散松葉 蟬 夏月
 秋迎キ 夏雜

目錄終

類題蕉翁發句集卷一

古終舎黙池輯

春の部

正月 正月も矢張と迎はや閏月
 元日 え日やありい淋し物さき
 えりの田を母の口とてあられ
 歳且 来々や懐きあくる後の酒
 けと多く大かきまゝ
 らうらや新年来るは春寒
 立春 ばらまてまこ九りの牡丹が
 今朝 庭洲の杜若は春風はけはれ
 嵐言ふ響くる三月小社と

きこぬ
 維中よりあふぬうらなこのよ
 木の梢はまんと田舎
 のあつて酒飲つらうか
 けととけあひあひのこ
 つ

花春 二りもぬらうりれはのよ

とあつてまじあつてまじあつて

入りりもいづれのあはれか

暮連 くらまほは春さうらう紙子殿

春風 くる風やきさるころて船ねぬ

素なほくおしく

まろせや人がうらうら二重山

まよる昔細

春雨 美草やりのぬき座もよる雨

うへは雨のしる

けるものきたりてはあはれか

とる雨やまほと伸を竹のた

まほを座して

ふれやうれ起し進じまの音

よる雨やまほ吹く八河川柳

とる雨や飯の果つとふゆの落

ねるころころま中りり

二重の行はりのりて

ける雨や二重のりりるあはれ

着菜 くらまほあはれあはれあはれ

あはれはうらまほもまほのあはれ

古細くかろあつとふり甲も

一と目ふ一と目つまうなつねうか

八河川柳のあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

芥 我らあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

土筆 まろせや人がうらうら

團扇あはれあはれあはれ

若草 あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

野老堀 山寺のあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

芭 くらまほあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

独活 まろせや人がうらうら

あはれあはれ

畑あ くらまほあはれあはれあはれ

あはれあはれ

海苔 衆のあはれあはれあはれ

あはれあはれ

及て何柳の傍ふか人より
けつふけなむらさきのあけとて

わとて我ももを流るる

又(白)と敷の中あつちの花

子(白)鏡のじしるふ柳とてか

柳(白)は(白)と(白)は(白)のふ

細代(白)は(白)のふか(白)とて

梅のあか(白)は(白)のあや(白)の花

里の子(白)より(白)の(白)牛の(白)鞭

園(白)女(白)とて

暖(白)室(白)の(白)奥(白)の(白)世(白)に(白)北(白)の(白)さ(白)え

共(白)も(白)や(白)け(白)し(白)た(白)る(白)の(白)ふ(白)月(白)と(白)梅

人(白)も(白)と(白)あ(白)は(白)や(白)後(白)の(白)ら(白)の(白)香

す(白)味(白)の(白)さ(白)ら(白)し(白)人(白)の(白)あ(白)ま(白)り(白)と

ま(白)す(白)と(白)て

為(白)弱(白)の(白)う(白)ろ(白)も(白)や(白)し(白)梅(白)の(白)花

何(白)う(白)し(白)た(白)る(白)人(白)と(白)車(白)の(白)二(白)月(白)ま

う(白)し(白)と(白)周(白)を(白)あ(白)ふ(白)た(白)花(白)子

の(白)う(白)ち(白)は(白)ら(白)し(白)る

柳

梅(白)り(白)ふ(白)の(白)川(白)と(白)日(白)の(白)あ(白)ら(白)し(白)花(白)が

ら(白)あ(白)や(白)白(白)の(白)花(白)本(白)の(白)よ(白)れ(白)ゆ(白)り

ら(白)ら(白)大(白)風(白)や(白)面(白)に(白)と(白)れ(白)柳(白)花

併(白)言(白)と(白)ま(白)ふ(白)と(白)あ(白)は(白)柳(白)と(白)を

在(白)東(白)寺(白)と(白)て

堂(白)と(白)流(白)く(白)峰(白)の(白)塔(白)や(白)も(白)と(白)り

後(白)継(白)く(白)對(白)と(白)て

の(白)流(白)く(白)の(白)ふ(白)柳(白)と(白)ま(白)り(白)と(白)て

古(白)川(白)の(白)う(白)ら(白)し(白)て(白)ま(白)り(白)と(白)れ(白)柳(白)が

吹(白)流(白)く(白)蝶(白)り(白)な(白)あ(白)る(白)柳(白)を

後(白)社(白)園

を(白)ま(白)り(白)た(白)ら(白)ふ(白)柳(白)と(白)り(白)の(白)流(白)る(白)を

後(白)の(白)う(白)ら(白)る(白)柳(白)の(白)あ(白)ら(白)し(白)る

と(白)ま(白)り(白)た(白)ら(白)ふ(白)柳(白)と(白)り(白)の(白)流(白)る

と(白)ま(白)り(白)た(白)ら(白)ふ(白)柳(白)と(白)り(白)の(白)流(白)る

ら(白)あ(白)る(白)柳(白)と(白)り(白)の(白)流(白)る

と(白)ま(白)り(白)た(白)ら(白)ふ(白)柳(白)と(白)り(白)の(白)流(白)る

八(白)九(白)ろ(白)う(白)ら(白)し(白)て(白)る(白)柳(白)の(白)あ(白)ら(白)し(白)る

全(白)華(白)と(白)柳(白)と(白)り(白)の(白)あ(白)ら(白)し(白)る

椿 雪のまきほくらの梅うか

さふとむく梅やたの美思心

春鳥 春鳥のうたはしらぬまの弱

猫恋 猫恋のまあまの山頭うか

田家 田家

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

白鳥 白鳥のうたはしらぬまの弱

船の子らあはれとほろ別が

想はる物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

かみあはる

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

雑

田螺

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

潮子 昔はる物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

餅

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

あまの物ぞくつらきもの

天の雲もなほまはるく
あまのこゝろもあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ

花雲

花雲のまはるくあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

花雪

花雪のまはるくあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ

花

花のまはるくあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ
あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろもあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

そのうち茶屋の八竿橋の
料も付く人多く入

竹馬

一甲の茶屋のりや味や

又茶屋のりや

土の茶屋のりや味や

酒屋

甲のりや味や味や味や味や

山嵐

茶の二所のりや味や味や

支那のりや味や味や

はろろ茶屋のりや味や味や

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや味や味や

飲んではろろ茶屋のりや

西のりや

茶屋のりや味や味や

おひつりや味や味や

茶屋のりや味や味や

示門人

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや

茶屋のりや味や味や

茶屋のりや味や味や

茶摘 茶屋のりや味や味や

茶店

躑躅 茶屋のりや味や味や

茶店

茶屋のりや味や味や

大和り御の時丹波布と
ちのち雨とと目のこぼりけ
るふ夜のほそ東なくさきこ
こわきこらるる

藤

多野で宿るころやふらのを
那波のせき岸寺仏の縁
昨の山を庵まらうして

宿まらうと宿まらうとまらうた
女もよしとまらうはあまらうか

山吹

山吹の香の葉のたのめらあまら

西河

ほろくくやま夜らうりけらるる

画巻

山吹やうららの縁の白く時

あまらうやまらうとまらうの歌

薊

薊の緒の目もまらうとまらう

山吹をてらあまらうとまらう

懐石丸

南河よりまらうのまらう

よらうとまらうとまらうのまら

田舎のよらうとまらう

春暮

春暮のよらうとまらうとまらう

縁つらぬらうとまらうとまらう

行春

行春のよらうとまらうとまらう

留別

留別のよらうとまらうとまらう

を水水情去

ひよとととにのふととととと

春雜

春雜のよらうとまらうとまらう

乙かま武り妙あり

乙かま武り妙ありのよらうとまらう

かま武り妙ありのよらうとまらう

初春

初春のよらうとまらうとまらう

二足の園とまらうとまらう

うたを水情のよらうとまらうとまらう

夏之部

四月のひかり本まは四月の櫻枝
更衣 ひと夜てうゝ花よるの更衣
短夜 みゝる花や秋の夜の真ま
灌佛 澄仏の影ひのすゝ梅枝のま

ちあはれとて
澄仏の目ふまはあまあまのま

牡丹 ちゝん薬源くもむら野のまはひ
枕畔彩も自ぬ自後

さうゝぬまのちゝんのたれり春
杜若 ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

あゝちゝんちゝんちゝんちゝん
大坂とて

うたつてとてはちゝんちゝんちゝん
山崎や野原をたぬとては

友のまはちゝんちゝんちゝん
ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

ひちゝんちゝんちゝん
ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

明海知里とて

粟粟 ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
後杜園

ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
後摩

海まをちゝんちゝんちゝんちゝん
名ふ八棒の月

麦 ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
甲斐とて

ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん
ちゝんちゝんちゝんちゝんちゝん

柘植寺

着果 わるじと由目花下ぬるや

日光山

あつらふき葉のさそひの光

後摩

木下 原にふさふさの草さへ木下草

中し出岸寺

夏木 木つぎもふさふさの草さへ木下草

立 幻燈庵

先このむねのまもりこそまもる

大垣の母を日之出の宮

勤王のふさふさの草さへ

云田のふさふさの草

茂 藤のふさふさの草さへ木下草

嵐山藤乃ふさふさの草さへ

云田のふさふさの草

袖花 袖のふさふさの草さへ木下草

悼大徳和尚

卯花 梅のふさふさの草さへ木下草

甚角母之七日遊寺

卯のふさふさの草さへ木下草

まろ花やうらた柳の及じ

後河のふさふさの草

盧橘 さるふさふさの草さへ木下草

二葉新

藪椿 中はふさふさの草さへ木下草

園のふさふさの草さへ木下草

のふさふさの草さへ木下草

かのふさふさの草さへ木下草

ふさふさの草さへ木下草

藤実 ふらふらふさふさの草さへ木下草

許はらふさふさの草さへ木下草

叶二枚のうら

推花 花のふさふさの草さへ木下草

小智自慢

旬 うらふさふさの草さへ木下草

なほはらふさふさの草さへ木下草

軽 さへ入小夜の中ふさふさの草

あつらふさふさの草さへ木下草

後念と生ておさへ木下草

あつらふさふさの草さへ木下草

とんぼくんとさうらけてい
さあひやういふ人い端
紫山のまろけ子屋と没
けきとけけく

鮎
杜鰲

又たさあらの川のあゆむ
なみやつらめさうかう都
かときんいまこ概結作世
口まへま他月夜の新ま
大のまふちれたあれこ
黒髪をこりて控りつ
志にさしけやほきんふ
清くせん再さき終てみ
かきん正月の梅の花さ
あつしゆる風やむま
ほまきん作やま戸のほ
持やりの中の中さう
鉄蓋のまのり
原た乃筆のま之と
かきん作り方や
都云々

表之の能

都きんうこの能らう表
こらのくア人のまの山
人形次のまのらと
生ん又人とま
白うまはは
本原くま
都云々

石ト一周を空風舞の

ほらまきん作まや
子奴をまきん作
ままともま
あま

ほらまきん作まや
子奴をまきん作
ままともま
あま

仏を尊うて

田やまや中やし市のみ奴
多々なる信

又へるれ物さくくの部と

あみやのやまに朝日おれま

馬林まのまなまたと柱ま

閑身 うき世とこひりせよかふる

行子 妹ありの縁に世をひこ

はこむとひく川の

産とま出るとして

老管 まさひまや竹の子に敷子老の信

孫身 もとまろくこまろふ

久まろく

孫何 たりりや中てあき孫身か

女まろくこまろくこまろく

別産身ま

産袋 二まろくふわれ初るるまの南

孫何 孫身まのまのまの

孫何 孫身まのまのまの

孫何 孫身まのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

かゝるもの同くは

こゝろにまよふまよふは

梅雨

梅雨や耳もすまふあつ梅の香

行儀のは馬

入まてんめいこに

懺

多しむ力も

糎

らまは

青じ

あやめ

菖蒲

あやめ

花

あやめ

田植

あやめ

あやめ

あやめ

うゑまふふらふら
 かうて今の白川もに
 ぬねてお座那小郎て
 左字おまき影まのせき
 ら能と殺くうの陽まて
 出でぬ人か遠まは
 尾張のうらや実の田植音
 尾張の田まて
 せと縁て代く小田のひかり
 花田まて
 早苗 ありあつて
 むまふ今の白川お出二り
 ありあつて
 早苗も縁まて
 志の人のおまて
 文おおのまて
 こつりあつて
 昔の女のおまて

てそふ女家あつてや
山登すうらうらうと
よせくまふくまふく
いふさうのちてふの面
もさふめつねのさる
は情も又くは情も
さすう小昔あはへてか
いづらねい

玉蘭とらふのさあ昔さの情
清れたる一々

紅の花
りまを流るれんぬのそ花
眉折とおもひあはせてねのた
紅んの時

鉄線花
そあはれ子で一風の後流る
子淵さ

紫陽花
あつたあやあやとふはの幻に
空ゆたや帷子時ひらきほろ
うぐたふめあつたさひ

百合花
瞿麥 碎て梅人かほとほほるの上
正成る係

蔵肝心此人之情

なほこふから涙や楠乃つゆ
の舟に波をうて古れぬ
孰れぬの花をいけてあふ
各弦の終る意とさく
花生より流るるそと
横面ふらけり

瓦花
ぬの花をいふあるけれぬ
花とまをこふふうり此意か
幻は度くこ母はは
夕ふし桐もあはれさうのた
重なる

茄子
りりやふと出相のしらあひ
流田うそ二ちの中
昔のささあつた小草のけ
己百さ

藜
中りせん藜の杖ふたる目まで
本園さす折碎日

竹植
ゆきくも折れある目かかると
葉実 くらんのまやたかこ枝の世は酒

訪任者

栗花 世の人乃又つはぬ花や物あらう

及すふやまふんく

標花 さんらうとゆちやうふんた有り

倉敷花 糸深やふふ西にふゆふの花

李 さらさら竹並にふふふ

白川 白蛇わうふ文成

つらとつらふ

水雞 園の宿と水雞ふ回るもの

大津湖仙さう

あら岩の水雞もあめ之船子

赤川さもから法各生て

及送してさうふ法生山田

成さふふりひん

水鳥 くらあゆと人のふや法各ゆり

六月 六月やさふふさかぐ丸山

くらむ世まのこくらんと

りありや枝丸く標茶屋

ふまみく

水月 宮乃河原左務水月月の親

水月と後病つこの果あひ

水月や細いあひも法録

あまうさまうらうらうとゆ

くこのふよりと身あひ

さふやまきくゆりらる

土用子 女れ人の小神もまや土用子

暑 捨のにはめてなるあつさうを

あつさうとゆふ入さうされ上川

新とん尻侍さう

氷室 水乃氷氷を尋ねる柳が

出相月山

雲峰 くののいんく出雲し月のふ

本ららららららららららら

くれいあまふ家々の成

結して二分のうら

ひりりしあつさうあやさささ

ぬや呉と情しつらうの家

風薫 風乃多もふ小池くさ上川

游力さう

庭や風乃をりぬ相おし

羽黒山にて

つらや言とさくはむる

小倉山に

お松とほろこや風乃をるさ

石川上大山に

風をるお歳ハ終もつころに

船押よこらもさのさあや海

四津もわのふ国のみすま

伝るる人の御ふくねく

岸せしなほる古たをて

凡つくるあふあんと夕まこ

文縁子お山の像と徳り

まなほ

もも伝るるあもまじしれ

小夜の中山にて

いぢちかりとらあまの下の下涼

お月のさほ葉うわのさすし

被風アよりけや弱る夕涼

風儀結列

わまらほ小夜の中山とよあ

十八楼記の暇に

はあふり同じとあふの涼涼

清風をる

さしこと銭敷あてはなまらや

すしこや月の三日月の相お山

袖の薄味を

あまこ山や吹浦かけて夕涼

夕新や鶯雁なまそは涼

花のうつくしくさくさくあひ

る古丸橋もあましく相は

寺の志のふたつめてお信と

ひささる女侍のやい涼

けしと

夕まほや橋よ涼むはのさあ

小頼とておけしや油土の影

伊東のほろの網涼とて

夕涼の夜のふくさるる

るころと川中ふさふさ

なほ(小夜とて)海のさ

初をらむを女に昔の結
わのゆしく買の相滅去
うもたしては解を人
とのふまうりの橋を渡
活毎のてこまそやま
はれくのてらること
ふたのぬくことなる

川友や岸掃あう又涼

曲をほそふ遊て田歌と

とる歌どきと

飯のつくか、うはきや夕涼

川中の指木まとうの涼か

煙水にね毛

さしと入持髪まのひひか

さすすささ

涼〜とや、曲の遊楽の枝の折

と東武よりよのて人〜

對り

糸の毛腫るるに麻まぬ

髪はまきり

清水

す〜と〜はあやう〜さか行
はま〜と〜あ〜はのほ〜はあか

後年よと

株の古井のは水まわるとん

那波の温水の神おね

お八幡のて遷〜奉り

てあ神〜さふあぬ〜よ

ゆとむゆ〜ひもゆ〜はは水

むす〜り〜やゆ〜ひ〜は水か

汗水より遊まはれあ秋

光野寺と

簞

あせの香ふ〜あ〜あ〜あ〜あ

音の園の〜と〜やむ

ま〜り〜ふ〜ま〜麻の香やたはら

無〜も〜い〜つ〜の〜梅

世の中〜は〜い〜か〜な〜ん

ふ〜ま〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ

扇の神〜と〜ん〜ん

團扇

ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

心太 清原の水汲をこころを

ふしの母道者

道明 水かけてぬきひうへんゆき

本名不明

ふたまたふた名と録一

て二のちり

蓮 はその香ふ首にたつたての面露

枝をくせ世ふかたふふきさうか

登貞 ひろやふきつと深むあひん

まのちり

ひろあのみり長城の屋敷か

子付はふきつと深むあひん

平田まの由りめと文の

まのちり

夕貞 夕やふきつとやふきつとふん

夕の白く衣のほ葉ふきつと

申ふらや母ておとふきつと

夕やふきつとあひん

水葱 夕やふきつとあひん上の鏡の湯

甲斐守

薄 山姥の願開をむくう那

夕やふきつとあひん

夕やふきつとあひん

夕やふきつとあひん

凡 夕やふきつとあひん

夕やふきつとあひん

朝きふきつとあひん

夕の皮むきつとあひん

真業 夕の夜に籠りてあひん

夕のまきつとあひん

柳のまきつとあひん

夕のまきつとあひん

秋のまきつとあひん

兼松 法信や信くらのこむきつと

柳のまきつとあひん

秋のまきつとあひん

夕のまきつとあひん

夕のまきつとあひん

梅紫山

あつらふやうなきこ入せぬのき

無名西条

秋て死ぬるれきん入梅のし

ゆふすお酒

夏月 晴きやうらぬむと夏月

きどあし朝あぬる夏月

かづの月ほ他よりあしお梅や

大津本節きよこと

秋草 秋ちりんの上やにきこ平

武原のねまき

夏雑 梅よりねらふまよと三月に

書きたる

弁多のら及し秋長の物織が

ころんやききひふけ(五)五羅織

甲斐の類月ころのち

よて途中の若き

さむらゝ(秋)秋のきよる夏月が

淨庵

なること(五)五羅織のねまき

ききやなつのは乃母らう

梅山やはあしころのら及の

なる山や梅らちの一里の

ら及もはひらひらつらう

月と(五)五羅織のねまき

そら梅のね一推きの

よてあひらと梅

梅き入らたと入らたは及梅が

ら及の梅

ききや(五)五羅織のねまき

那波の光あし

ら及山は(五)五羅織のねまき

かつ山や梅梅とら及梅が

梅あつらふやうのら及梅が

梅生ん

ふのあつらふやうのら及梅が

梅梅

ら及(五)五羅織のねまき

ねまき(五)五羅織のねまき

秋草(五)五羅織のねまき

ふもほもくたかちまはにん

原前山歌

登風つるの原はうさうさや

ちを飯こと

かみもやあまのりつまのわと

井形の水描

せりまやぬ水こころのうへ

世のまこと

まのおやのたまこてりしつり

かみのおやのたまこてりしつり

かみのおやのたまこてりしつり

類題蕉翁翁發句集卷一

類題蕉翁翁發句集

秋の部目録

文月 今朝秋 初秋

來秋 残暑 冷

身入 稻妻 七夕

星合 銀河 硯洗

盆 墓参 魂祭

二百十日 扇置 角舩

露 霧 暴風

秋風 散柳 木槿

桐一葉 朝貝 蘭

秋海棠 女郎花 芭蕉

萩 萩 芒

角舩草 葛 鬼燈

草花 瓢 葱

蕃拵 綿 冬瓜

芋 蟲 蚕

竈馬 蜻蛉 蓑虫

鶉	鳴	鹿	八朔	夜寒	秋暮	落水	三日月	下弦	名月	今日月	月見	十六夜	月	駒迎	砧	藥堀	芙蓉	雁來紅	芦	蜀黍	粟	蕎麥花	初茸	松茸	茸狩	早稲	稻刈	落穂	稻雀	渡鳥	四十雀	鴈	鮭	鮎	紅葉狩	後月	名残月	并市	御辻宮	秋の露	菊	紅葉	木の實	椀の實	椀	柿	行秋	暮秋	秋雜
---	---	---	----	----	----	----	-----	----	----	-----	----	-----	---	----	---	----	----	-----	---	----	---	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	---	---	---	-----	----	-----	----	-----	-----	---	----	-----	-----	---	---	----	----	----

冬の部目録

小春	初時雨	時雨	木枯	初霜	初雪	初冰	冬龜	炒閑	口切	神ノ苗王	神ノ旅	夷講	御傘講	冬枯	散紅葉	落葉	木の葉	復花	麥蒔	蕎麥刈	大根	枯草	枯葱	枯尾花	冬牡丹	水仙	寒菊	枯野	霜	雪	雪見	山眠り	雪九ヶ	氷	霰	寒ッ	火燧	圍炉裏	火鉢	火桶	炭	埋火	頭巾	紙衣	蒲團	衾	鉢敲	霰酒	乾鮭	河豚
----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	-----	----	----	----	---	---	----	-----	-----	---	---	----	----	-----	----	----	---	----	----	----	----	---	----	----	----	----

あのをち梅まをまふりよひか
或知織の白くなまは様
大祓のりとおとうやや
ちりつゝつゝ

いあまふ快らぬ人のさうま
と兼律一とて

いあまふやぬのあそこのめあ
本あらさうつ宅小骸骨
ともの田敷をうまて後
すつ石とせむて井まきり
壁ふりけしうまそふま
あのをあそこのけ遊
ふこあんやりの龍踏を
枕とて後くまうとど
こまうつあひのひま
あそあそこのめあ

七夕 月弓や塘の二を思ふあそ
あそこのめあ

いあまふ快らぬ人のさうま
と兼律一とて

いあまふやぬのあそこのめあ
本あらさうつ宅小骸骨
ともの田敷をうまて後
すつ石とせむて井まきり
壁ふりけしうまそふま
あのをあそこのけ遊
ふこあんやりの龍踏を
枕とて後くまうとど
こまうつあひのひま
あそあそこのめあ

星合

いあまふ快らぬ人のさうま
と兼律一とて

いあまふ快らぬ人のさうま
と兼律一とて

銀河

いあまふ快らぬ人のさうま
と兼律一とて

出雲浦のまきくさ
あふの仙の地ふのわらう
吉原地を拂て蒼天
わら日月のふあふらう
を聞てうらむうふあ
まあうてまきくさ
侍人もわをうらふ
文人もまきくさ
まきくさくさ
射の乃の侍人も
侍もまきくさ
せんり

暴風

重なるの將の百も
きつ時雨のまきくさ
暴風 狂もまきくさ
ふまきくさ
秋風 狂もまきくさ
侍もまきくさ
侍もまきくさ

秋風

侍もまきくさ
侍もまきくさ
侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

侍もまきくさ

伊勢紀行の跋

あはれうゝあはれは日く秋のそ
懐ね念ふる葉

秋をふとんと秋の葉の秋

時水も流石を送る

又送りぬけしやささ木風の風

柳陰射す

散柳

あはれはあはれは我の種と寄

全り思ふ

木槿

庭掃てあはれあはれ柳

馬上吟

桐葉

ささ木の木槿はあはれ柳

尚志庵寺にて

朝負

傍柳あはれあはれあはれ柳

和具角を葉寄り

あはれあはれあはれあはれ柳

嵐寺

あはれあはれあはれあはれ柳

人々都かあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

閑園

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

あはれあはれあはれあはれ柳

瓢の流

米のまじりては瓢の流

古詩

芭蕉 若くはやその流をたぐはく

とみまの流

はるの世のて鹽の白くま

ひまの世のて塩の白くま

瓢の流のて塩の白くま

とみまの流のて塩の白くま

ひまの世の遊のて塩の白くま

瓢の流

ゆきをひく人かや雨の秋

瓢の流

流のつやもはるの流のつや

つよの流

小瓢の流もはるの流のつや

瓢の流

あつまつとあつまつあつまつ

あつまつとあつまつあつまつ

結びとて

風をよきとらふ柱の流の秋

まほはち老我のあらは

してあつまつとあつまつ

~~~~~

芒 ちのよしまの流のつや

角鹿草 乃わはしる角力多のたの流

あまのそまをたて

葛 けこまをたてはるの流のつや

けこまの流のつや

横や今とてつよつよ

はるの流のつや

鬼燈 ぼつとあつまつとあつまつ

あつまつとあつまつ

草花 美園のつよの流のつや

あつまつとあつまつ

あつまつとあつまつ

瓢 夕ややたつとつよの流のつや

よつとつよ



葱 湯煎羊羹を食ふはたては

本意の田舎にありて

数々の人々を討て

蕃餅 豆のうたと和糖を煮て

かくらぬふもやの葉は

大なるのしほもあは

まそもあつたものと

子屋の田舎にて

綿 わらわらとあつた

ねんぐり

冬瓜 冬瓜や冬瓜は

特仙風

芋 芋のうらやまは

西の谷

虫 虫のうらやまは

金言にて

蚕 蚕のうらやまは

ねんぐり

ねんぐり

ひんがし

かたの

林社の

うらやま

隣の

なまの

あつた

ひんがし

木の

海士の

蜻蛉

多の

のうら

は方

養蚕

田舎

相乃

石の

田中の



鳴 刈のよやも福のくの晴のこ  
鹿 ひじのや一寸かあふのこ  
いさふりそ牡鹿もよや牡鹿

常呂にて

いと鳴す鹿のよやよは麻

八潮のうら

八潮 八潮や天のうらまたちのう

曲琴をうたぬ

夜寒 乳駒のわらふるよこさう

六柳さまの二人よとと

庭をひきこたむらあや

きく

秋暮 いくふ里海つかりや村のれ

言の旅をたててはし杖のこ

あふまふふ天逢かや杖のき

あはれまふ里のほのくは

本因

死もは旅麻の果よあはのき

涼川の庵

持郎の尻野は秋のそ

かきわたり福のきまりや村のれ

ま行自画像

こらむけ秋の麻き杖のれ

新思

けろやひ人きくあきん

あふのれあきんさう中

作もあきんや二交記もあき

三月 三月月や新秋の夕つ月

三月月やまのひまきり

大宮福成院より

何ものえきんもあきん

嵐景抄七日

又やそのヒリ八燕の三日

下弦 二十日はあきんやあきん

いさふりあきん

の甲か一板とあきん

あきんよりあきん

あきんや二十七夜も三日

あきんもあきん

あきんもあきん



とくとり

名月 名月のあまや五十一ヶ所

まじくとも名月の夜や茶臼山

教習三夜泊

名月や也ありより定あはれ

名月やうろちとも御田月

名月

夏うけて名月のあまやまじくとも

名月や漱水よりふ七小町

名月や以道あふまのあふ

名月や鶯雁ならをき手原

名月や只七平架の教習

名月や我家ありとも門切

名川

名月や門下と本宮後じり

伊賀山中こそ二也

名月やたうとんてあふ

名月く昔原のきうや田のうり

名月や地をうてよもすうら

名月や西より同きあひま

等載あふあひ

名月のあふあひあふあひ

義仲寺

今月 三井もの門よりあふあひ

本宮後じりあふあひあひ

月見

うらうけやまは行歌あふあひ

重なりあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

田

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ

名月やあふあひあひあひ



月を眺めり時ぞ

あつたよとてそまの月れあ

十夜

Saint's 月夜

お如の屋へ

十夜おやあをさるるの月夜

聖の屋十夜

後めく月へ入る屋あき

中あつてお如の屋へ

十夜おやあをさるるの月夜

月を眺めり時ぞ

後めく月へ入る屋あき

中あつてお如の屋へ

月

後めく月へ入る屋あき

中あつてお如の屋へ

十夜おやあをさるるの月夜

月を眺めり時ぞ

後めく月へ入る屋あき

中あつてお如の屋へ

十夜おやあをさるるの月夜

月を眺めり時ぞ

おたのしくてお如の屋へ

あつたよとてそまの月れあ

お如の屋へ

十夜おやあをさるるの月夜

月を眺めり時ぞ

馬お麻てお如の屋へ

神保山

三十日月あめとせの枝と花

川舟やよとてそまの月夜

お如の屋へ

月やその輝の月の月夜

麻の屋へ

月を眺めり時ぞ

田家

草の葉や月夜屋の輝とて

お如の屋へ

映橋よとて

お如の屋へ

お如の屋へ

月を眺めり時ぞ



海の尾

月をみてもうらやまの影  
越山

我仲の舞のよる月や

之係二年つるの儘り

月とそと気はの心解ふ

法鏡り上人の古例と

きく

月清く遊りのもてる砂の上

溪

月のころ雨ふ角かみりりり

仲秋の夜寝がえよとまり

ぬあつゝの相くうゝこの

ほよ清くあつゝて坊と

ふのちのあふと入てお

さきまへと就けもさき

後て引あけへて後もあ

ときく

月よと清くあつゝる海の底

斜山頓真

くんとひけの西ふよる伊

吹こもたれよよる夜

よもよみ只孤山の煙と

とあまふ月わたのほし伊勢山

伊勢山又さうもよるら

られ坊らけとあまほりの

ふふひくく相とまかん

やふえんはれい旅のそら

と雲に坊らぬりのりあを

のまめあまておとす

くけいんと今更すわて

月をみてもうらやまの影

悼きと侍てんは下

とをを相あふんせけの月

わつたの四角か新と雲の月

とあまふんはま

月代や懐ふもと雲の影

消息

水のつたつと帰る夜や雲の月

はれの度と雲の影



あれも世にのりまね  
 まさきさるけうの赤山ふ  
 徒らな情と暮そ西りの  
 よませりやうしんあま  
 のせしれういあるはなや  
 しまるも後のあやうら  
 はのその月やとあまの  
 縁言名も夜

九を女起とも月のそつりね  
 枝の枝風想れう情と削  
 任ひのちらほは水う初と死  
 と徒らな月の上とわひお  
 のそ無ふりこと裁う  
 と百派をわてわうらん庵の月  
 海川の末あかねと三和  
 お舟とさう

川上とこの川ちや月のそ  
 東帆老人遊よふまね  
 妻はふれやとたり  
 入月のつらけのほろく那

善生と唐と

今宵いれ吉舟の月も十吉里  
 睡ふらう影月下送迎  
 月とわや梅飾うら悦のとも  
 こそ折るま

秋もそやほつく雨と月の歌  
 山をさるふのそやあゆのつき  
 駒迎 村やま川あゆのそあまひん  
 砧 鉄立や二有ふ地うつかへ衣  
 とははとあゆはるねり世

の田よてたよんふの  
 上の衣とこりねて  
 刺さつるあゆの影のひきまひ  
 よう酔うと

きぬい打て折るまきさるやほのま  
 茶う清てお斗あゆのまきぬこが  
 後のまきあゆのそ袖と佑うか  
 こぞ一竹の縁

茶壺 ひらりと春中ふあつて茶壺  
 遊女の虫燈



芙蓉 枝ぶりの日やうつらうつら

きり目のとくもふはたれか

鴈来紅 けいとうや雁の月やあやう

とくこれかうらうらわあか

野黍 野黍や野黍の秋のうらうら

枝の竹葉彩とまげきん

粟 粟穂ふゆつとあつたあつた

知豆の月やあやうらあ

とあつと

よれもややあつとあつたあ

伊勢の針はふらあつと

つらあ

蕎麦 蕎麦はふつとあつたあ

三月の月やあつたあ

初草 初草はふつとあつたあ

松茸 松茸はふつとあつたあ

茸狩 茸狩はふつとあつたあ

かたえのあつと

早稲 早稲の香やあつたあ

人ふあつと

稲刈 稲刈はふつとあつたあ

落穂 落穂はふつとあつたあ

稲雀 稲雀はふつとあつたあ

渡鳥 渡鳥はふつとあつたあ

早雀 早雀はふつとあつたあ

あつと

鴈 鴈はふつとあつたあ

銚子 銚子はふつとあつたあ

あつと

秋 秋はふつとあつたあ

あつと

後月 後月はふつとあつたあ

あつと

幾月 幾月はふつとあつたあ

あつと

稲刈 稲刈はふつとあつたあ

あつと

早稲 早稲はふつとあつたあ

あつと



并市 并市てふ別なる月人そ

月人そ月人そ

月人そ月人そ

并市 月人そ月人そ

母の白髪と母の

秋霜 月人そ月人そ

を陽

菊 菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の

菊の白髪と母の



母茶八杯の中と菊は糖  
りてきり〜んわい

蝶も毒を能く吸きこれ縁うを

九月九日乙卯二枝と楢

赤うらむわ

あふりやりのてしほもあは局

りてころのあむや神台の後は菊

花ねまもあて

新行で菊の香のよるを茶の華

八両極しく

きくのた〜んを茶のり〜んはる

大門を〜んわんり

深うおや古りつる茶の香のあは菊

周知〜ん

白き〜んの園はま〜んを茶の華

あふり〜んて

きくはまやま〜んを茶のあは菊は

菊はまやま〜んを茶のあは菊は

〜んり〜んて

茶の香のよるを茶の華

きくはまやま〜んを茶のあは菊は

菊はまやま〜んを茶のあは菊は

〜んり〜んて

茶の香のよるを茶の華

きくはまやま〜んを茶のあは菊は

菊はまやま〜んを茶のあは菊は

〜んり〜んて

茶の香のよるを茶の華

きくはまやま〜んを茶のあは菊は

菊はまやま〜んを茶のあは菊は

〜んり〜んて

茶の香のよるを茶の華

きくはまやま〜んを茶のあは菊は

紅葉 りつりやまを茶のあは菊は

あふり〜んて

木葉を茶のあは菊は

榎葉を茶のあは菊は

椋葉を茶のあは菊は

橙 椋や椋葉のあは菊は



幻燈弄りと車由を来  
の二人

柿

きつ痛と柿とくわきとあつた  
きつ柿や一はとくわきとあつた

松田共出うた

根又と根とのみの庭や柿とん

片母とをるる

行秋

里あつ柿の本のあつた

り柿やあつた

拾のうらとくわきとあつた

ゆつたのうらとくわきとあつた

ゆつたのうらとくわきとあつた

清水のうらとくわきとあつた

暮秋

ねとこの船とあつた

懐老杜

几帳とねとくわきとあつた

秋雑

又後のうらとくわきとあつた

るのりやきつとあつた

清水のうらとくわきとあつた

清水のうらとくわきとあつた

秋十とせやとあつた

扇舟前

このねのうらとくわきとあつた

田家

かつた田家のうらとくわきとあつた

田家

送つたうらとくわきとあつた

さつたうらとくわきとあつた

あつたうらとくわきとあつた

秋十とせやとあつた

小ねとあつた

あつたうらとくわきとあつた

はつたうらとくわきとあつた

田家

旅のうらとくわきとあつた

あつたうらとくわきとあつた

小名あつた

秋十とせやとあつた

車前とあつた



あはれはつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき

ねはよき秋の夜はつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき  
あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき

冬之部

小春 月の澄ぶとふもな月此月

人の件は秘せりて

初詣 くらきれ秘の字と銭の字

くらきれ秘の字と銭の字

くらきれ秘の字と銭の字

くらきれ秘の字と銭の字

や縁人

縁人と縁人あはれはつらき

伊加えの山中

伊加えの山中

伊加えの山中

時雨

あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき

あはれはつらきあはれはつらき



あまのつねにきこむるまのさき

かきのたけしきほのむら

くわいあつりくくわいあつり

きいほんた

けはふふふ種まさんふふふ

ふふ種まさんふふふふふのふ

あふふふふふふふふふふふ

ふふのふふふふふふふふふ

一屋指ふふふふふふふふふ

ふふ種まさんふふふふふ

ふふふふふふふふ

作りまのふふふふふふふ

四里のふふふ

あふふふふふのふふ種まさん

ふふ種まさんふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふ種まさんふふふふふ

ふふ種

人ふふふふふふふふふ

あふふ種まさんのふふふふ

あふふふふふふふふ

あふふふふふふふふ

あふふふふふふふふ

あふふふふふふふふ

あふふふふふふふふ

あふふふふふ

木枯

あふふふふふふふふふ

竹のふふ

あふふふ竹ふふふふふふ

あふ指やあふふふ痛む人のふ

あふふふふふのふふふふ

あふふふ

あふふ種まさんふふふふ

あふふふふふふふふ

あふふふふふふふふ

初霜

あふふふふふふふふ

あふふふふふのふふふ

あふふふふふふふふ



車あつていひなりまゐ

神楽八日よみしるまゐり

なつとつこい

初雪

とく雪あつて幸々佳あまうらら

たふらたふたふた

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

は川大橋あつていひなり

けいさやあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

初氷

せう氷あつていひなりまゐ

冬籠

ふゆあつていひなりまゐ

ふゆあつていひなりまゐ

贈酒告

酒水の強よみしるまゐ

酒一匹あつていひなりまゐ

酒あつていひなりまゐ

酒あつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ

支梁あつていひなりまゐ

口切

はきりふ雪のなをきりまゐ

爐関

ゆきあつていひなりまゐ

ゆきあつていひなりまゐ



神の

西ののちたれは神の居る所  
を月のこも武のいふ

神の旅

都の神も旅の目殺る

夷講

えいげん講の夷小津をさう

うつゝの舟のあり美入海

御講

御講の舟のあり美入海

清ら

山命講や世のちうあ酒井

冬枯

ふゆの甲せうとふんはる

をんねの磯のあり美入海

月の仄とあへるの雲

あ旅の心をいそ

散葉

さうらふ葉やほくくらのあり

あまの平原に地をう

えんてはか百車ふんあ

る御講の舟のあり美入海

曰竹樹ひをふ玉ふ知こ

りこまことああらのあり

あつて海濱のあり美入海

りなほち

落葉

百のちりてをの海濱

まふの枝のあり美入海

文人よ我ををらうと海濱

大津を過る

木葉

二天のふもはしりの海濱

九色の舟のあり美入海

位をひくを源川の地

りふらうを美入海

美入海の舟のあり美入海

全なきのあり美入海

とまらん人のあり美入海

坊のあり美入海

あまの

あまの舟のあり美入海

料をのあり美入海

浪花

こししよの海濱のあり美入海

海濱のあり美入海

春時

あまの舟のあり美入海

著

あまの舟のあり美入海

清ら



大根 三十里尾張大根の殆ど那  
蜀の後大根のみさふなり  
漬也

口よくさきぬらう大根  
大根引とつるを

細き小根をさき大根引

土床に縁鉢うてき大根

と解く後日大夫小法師を

ものふの大根うんとあけり

大根の後厚とこひて

枯草 花びらねをわらわす大根は種

燕田こく

枯葱 志のふさふを解り人申りうれ

三粒を解りて深川の事

唐ふゆふの旧交にさす

ふゆふのあつていふと回

いこく入物

桔花 どのかむかむとやうに枯草

葉名古きとて

冬井 ちのけんふふとて雪のほとさ

燕田抽人さきまの

用とおのひよとて

水仙 水仙や白き花のあつり

三のそ白書とてさす

二人一柄とて後の名とて

寒菊 その白い花より白水仙に

空きくや粉縁のかる白の湯

枯野 さあけりて花とてさす

花よとてさす

霜 ちのそ白き花をさす

ちのそ白き花をさす

ちのそ白き花をさす

ちのそ白き花をさす

白きとてさす

燕田くさす

ちのそ白き花をさす

ちのそ白き花をさす

ちのそ白き花をさす

ちのそ白き花をさす



昔の染の表を寄るけこのをね

病中

くまのむくもてまねの松の非

深川大橋も松ぞり時

みづのうらみで清橋のーも

晴あざのよとめりてねるを

耕月

空をまよ上るの影やいまも

あふまら惟もまのゆ紋うね

里あざとわとまもけこの田ま

よふあはれ人のめとと

あわれまをせらるるまの雲の行

まの緒や烟霞あつらぬ土の老

まのりやう露の雨織ふたき朝

風のたてまのやぬまうりてた

ふふのまを極原と園の染う非

ゆきの井お田ぬらうまあふん

雲の朝ひらう千鞋と嘘ひらう

ぬ水うら光物うらうはまのま

庵ふらうらま

深川や花のまを寄るけこの

抱月

市人ふらまを寄るけこの

杜園まを寄るけこの

ののあはれうらうら

まを寄るけこのまを寄るけこの

まを寄るけこの

まを寄るけこのまを寄るけこの

まを寄るけこの

閑居歳あはれとあ

ゆのあはれとあはれとあはれとあ

あはれとあはれとあはれとあ

舞田古橋

まを寄るけこのまを寄るけこの

信濃の

まを寄るけこのまを寄るけこの



さし甘んじて老の後は志がみの  
 里ふこれ坊とあり今大  
 津松本より智月といふ  
 老尼の行ふるておるこ  
 めとゆは出らるつておりし  
 ちねむ

おねの足元の曲し中志がみの音  
 湘水聴き

はらの上を這はむとて遊童の指  
 大書や時めくゆりはる教の家  
 口けあふむ移し雲のあふりか  
 小町の虫燈

ささやきをのめぬりよのよとま  
 るる度よすあ

本橋のあふり織やよりの音  
 雲とふ梁なむむ住居う那  
 竹の燦

雪目

なつては言はけ井のけしれたが  
 雪花の南に枝やまきこく  
 夜更の雪し口夫よふ雪をさるる

去年のこひ海をわのひ  
 如て越人よあふり

山職

二人かゝり雪はをまのぼろろ  
 山にゆらゆらふり下りて  
 山は横波のよいてやまのひね  
 雪ははらふりしはあふり  
 さくらふふたよりして朝  
 あゆふあふたつとる我  
 雪ののいとあむむはは  
 ねくつる脚とかりしを  
 煮るこ夜は基とあてた  
 く性は雪をぬむ人として  
 まつりこひささるあふり  
 雪のあふり

雪丸

雪丸をさけし紅梅をまき雪丸け  
 深川を夜のほ

氷

梅の雪はほとて揚氷る夜は  
 氷若く偃菊う咽とる梅雪  
 あまの雪をこ











早梅の園とてんとやゆきまふ

杜若と傍らるるまふ

鷹

たふひのそとをさうなつてゆき

杜園のふ草とてゆきまふ

ふらふらとまふのそとをさうなつて

きん

とまふらうらうのそとをさうなつて

師

月白くゆきまふのそとをさうなつて

十二月九日一井

縁帰らばゆきまふのそとをさうなつて

五百九十三の暇のそとをさうなつて

まふのそとをさうなつてゆきまふ

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

うらふらゆきまふのそとをさうなつて

うらふらゆきまふのそとをさうなつて

ゆきまふのそとをさうなつて

は里とゆきまふのそとをさうなつて

度のそとをさうなつて

なまふのそとをさうなつて

寒

うらふらゆきまふのそとをさうなつて

なまふのそとをさうなつて

かきまふのそとをさうなつて

早咲 梅のそとをさうなつて

早咲 梅のそとをさうなつて

梅のそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて

ゆきはゆきまふのそとをさうなつて



餅橋 ちぢい三平りおと餅のま  
らねく餅と餅のわらじ  
餅花 ちぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ

衣祝 ちぢい餅と餅のわらじ  
古曆 ちぢい餅と餅のわらじ  
幸志 ちぢい餅と餅のわらじ

海の高き山を築丸  
無り

半りちぢい餅と餅のわらじ  
月未ちぢい餅と餅のわらじ

人あぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ

このちぢい餅と餅のわらじ  
せつちぢい餅と餅のわらじ

海の高き山を築丸  
ちぢい餅と餅のわらじ

年取 ちぢい餅と餅のわらじ  
幸市 ちぢい餅と餅のわらじ

年暮 ちぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ

ちぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ

ちぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ

ちぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ

ちぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ

ちぢい餅と餅のわらじ  
ちぢい餅と餅のわらじ



摩多の果は初の中か  
川あや又母のいませりせ

ことさあぢあむもあぢ  
あふみのあまあありて

右らや鷹の法は後年つくれ  
監人よ遠くおもも年あき

拾のよろろひあまこころのこま  
分別のあまこまこころのま

極楽

行年

ゆく年やゆめおのふねつり  
りて年つてあまこころの梅の花

大年の一夜は人あまひて

冬雑

梅千ふらふあまあまあま  
ふらふ水あまあまあまあま

西日一言あまあまあま  
さうあまあまのあまあまあま

わらあまあまあまあまあま  
大色度さる園に居せら

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま



月夜の思ふはなれど  
思ふはなれど

はなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

はなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど



